母乳育児支援に関する教科書分析の枠組み作成と分析結果
ー看護基礎教育における母性看護学に焦点を当ててー

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-01-21
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 涌谷, 桐子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://opcnr.repo.nii.ac.jp/records/386

氏　　名	涌谷　桐子
学位の種類	博士(看護学)
学位記番号	沖看大博第８号
学位授与年月日	平成 23 年 9 月 21 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	母乳育児支援に関する教科書分析の枠組み作成と分析結果 −看護基礎教育における母性看護学に焦点を当てて−
論文審査委員	主査　教授　前田　和子
	副査　教授　玉城　清子
	副査　教授　神里　みどり
	副査　教授　嘉手苅　英子
	副査　教授　大湾　明美

論文内容の要旨

日本では、9割以上の母親が母乳で育てたいと望んでいるが、母乳育児支援に関わる保健医療従事者はこの要望に十分応えられておらず、生後1ヵ月時の母乳栄養率は42%にすぎないという現状がある。この課題を解決する方策として、毎年4.5ー5万人誕生している看護師が看護基礎教育において母乳育児支援に関し科学的根拠に基づいた教育を受けられれば、将来日本の母乳育児支援を前進させていく大きな力となるであろう。

本研究は第一段階と第二段階の 2 つの研究から構成されている。

第 1 段階　教科書分析の枠組み作成

【目的】本研究の目的は、国内外で影響力をもつ代表的な母乳育児支援方式の図書の内容分析から、①教科書分析の枠組みを作成すること、②内容の適切さを吟味すること、③各支援方式の特徴を記述することであった。

【方法】分析した図書は、国内外の代表的母乳育児支援方式の図書 7 組であった。分析手続きは、各図書から文章を文脈ごとにほぼ原文のまま抜き出し、その意味内容を要約してコードとし、同種のコードをまとめてサブカテゴリー、さらにまとめてカテゴリーとし、教科書分析枠組の原案を作った。この原案に基づき、項目別に記述の有無、記述内容の違いと適切さ、および詳細さの程度から各図書を比較した。

【結果】分析の結果、202 のコード、63 のサブカテゴリー、13 のカテゴリーが抽出された。これらに看護基礎教育に不可欠と考えられる項目として、8 のコード、3 のサブカテゴリーを付加し、全部で 210 のコード、66 のサブカテゴリー、13 のカテゴリーからなる教科書分析の枠組みを作成した。項目別に各図書の記述内容を比較した結果、妊娠中の乳房乳頭マッサージの是非、自律授乳か規則授乳か、母乳に「乳質」はあるかどうか、などをはじめ、

いくつかの項目において相反する見解をとっている方式があることが分かった。
【結論】作成された教科書分析の枠組みとともに、各項目別に実施した内容の適切さの検討結果は教科書分析の有用な基準となるであろう。また、母乳育児支援方式の中にはお互いに相容れない考え方に基づいて書かれた図書もあったので、これらの図書を活用する実践家はそれぞれの哲学を無視するような利用には慎重でなければならないことも明らかになった。

第 2 段階　教科書分析
【目的】上記枠組みを用いて母乳育児に関する看護学教科書の記述を分析することにより、看護基礎教育に必要最小限の知識とスキルを明らかにするとともに、教科書の質を評価し改善に向けた提言をすることであった。
【方法】分析対象は 2000 年 1 月ー2010 年 3 月に出版または改訂された母性看護学の教科書 11 組であった。分析手続きは、各教科書の母乳や母乳育児に関連する文章や図表をそのまま抜き出し、第一段階で作成した分析枠組のコード番号を割り振った。各コードはサブカテゴリー（項目）としてまとめ、①項目別の記述の有無、②項目別の「内容の適切さ」、および③「引用文献の記載の適切さ」を判定した。
【結果】各教科書の記述を各項目別に検討した結果、66 項目全てを記述している教科書はなく、全ての教科書に記述があった項目は 13 項目、どの教科書にも記述がなかったのは 3 項目だった。残り 50 項目について各図書の記述を見ると、記述が最少の図書は 17 項目、最多は 31 項目と幅があり、各図書の構成は多様で、統一性が見られなかった。
　記述内容の分析からは、適切ではない記述が全教科書にあり、各教科書の不適切な項目の割合は最少で 5%、最多では 73.5%に上った。
　全図書に記述されていた項目総数のうち、内容や引用文献の両方が適切であったのは 5.2%だったのに対し、内容が不適切で、且つ引用文献がないもしくは不適切であるのが 33.2%もあった。記述内容が不適切な項目が多い教科書は、引用文献の記載が少ない傾向にあった。
　教科書分析の結果、看護基礎教育で学生が学ぶべき必要最小限の知識・スキルとして、4 組以上の教科書に記載されている 48 項目は重要で外せない項目と見なし、その他の項目のうち筆者が最新の情報から重要と考える 10 項目を加え、計 58 項目を決定した。
　【結論】日本の看護学生は、看護基礎教育の教科書からは、母乳育児支援に関する科学的根拠に基づいた一貫性のある情報を得られていないと推測された。教科書分析から看護基礎教育における母乳育児支援に関する最小限必要な知識とスキルとして、58 項目が提案された。今後は、看護教育者や実践者を交えて、さらに検討を続けて行く必要があろう。また、本研究結果から、科学的根拠のある情報を引用文献とともに記述することや母乳育児支援に詳しいレビューアーの参加等による、教科書の質改善が必要であることが示唆された。

論文審査結果の要旨

本論文は、産婦人科医であり、国際認定ラクテーション・コンサルタント（IBCLC）である筆者が、我が国において取り組みが遅れている母乳育児支援の課題を解決する有効な手段として、毎年約4万人が誕生する看護職者に注目し、看護基礎教育における母乳育児支援に関する教育の質を高めるためにどうすべきかを探るために、取り組んだものである。

本論文は主に、国内外の代表的母乳育児支援方式を紹介した図書７組の内容分析から教科書分析の枠組みを作成した第１章と、母性看護学教科書11組の内容分析から、看護基礎教育において母乳育児支援の教育に最小限必要な知識とスキルを特定した第２章から構成されている。

看護教育のあり方を研究する方法として、エキスパートである看護職者を対象としたデルファイ法、現在実施されている優れた教育プログラムの調査・分析などがあるが、本論文は現在市販されている教科書の母乳育児に関する記述内容を分析する方法を採用している。この方法は、母乳育児支援を専門とする看護職者、特に看護教員が少ない日本の現状では、最も現実的な研究方法といえるだろう。海外では、母乳育児支援に関する教科書分析研究は2編あったが組織的研究とは言えず、我が国では、母乳育児支援に関する看護基礎教育がどのようにあるべきかを検討した組織的研究は全くなされておらず、本論文が初めて取り組んだテーマであるという点からも独創性のある研究であるといえる。

第１章では、各図書に記述された膨大な文章を丁寧に内容分析した上で、コード202、サブカテゴリー63、カテゴリー13を抽出し、その後、これらに最新の情報に基づいた考察からコード8、サブカテゴリー3をさらに追加し、最終的に教科書分析の枠組みを完成させている。さらに、これらの枠組みを用いて項目別に各図書を内容の適切さの観点から比較し、間違った記述や不適切な記述を特定し、教科書分析にあたって、内容の適切さを判別するときに利用できるようにした。教科書分析にあたり分析枠組みをどうするか、どう作るかについて先行研究が少ないなか、このように新しい手法を提示したことは評価に値する。

また、記述の類似性と差異から各方式の特徴を明確にし、母乳育児支援に従事する実践者に主張の違う複数の方式から知識やスキルをバラバラに取り出し利用することの危うさを警告している。

第２章では、2000年1月～2010年3月に出版又は改訂された母性看護学教科書11組から抜き出した膨大な記述を、丁寧に分析枠組みを用いて分析している。分析から、母乳育児に関し看護基礎教育で教えるべき最小限の知識とスキルはサブカテゴリーレベルで58項目であることを提案した。58項目は、教科書11組中4組以上に書かれていた項目48項目に、筆者の判断で10項目を追加したものであった。この導き方、導いた結果が妥当であるか否かは議論があるところであろうが、この段階では一つの仮説としての提案と受け止めてよいであろう。筆者も研究の限界、今後の研究で言及しているように、多くの看護実践者、看護教育者を含めた更なる検討が必要である。

また、本論文は、教科書分析の過程で現在の我が国の教科書の問題点を明確に浮かび上

がらせている。誤った又は不適切な記述が教科書によって5%～74%あったこと、全体としては4割にあたり、その9割に引用文献の記載がなかったことを明らかにした。これらの問題は教科書に関わる出版社、著者、編集者にあり、これらを改善するためには、引用文献の明記、編集方針の徹底、教科書作成時にレビューアーを参加させることを提案している。これらは、母乳育児支援教育に限らず、根拠に基づいた看護（Evidence based Nursing）を目指している看護教育に対する貴重な提言になっており、優れた知見を導いた研究といえよう。

修正が必要な点として、①図表に関し説明不足なのでより具体的に書く、②文章が全体的にわかりにくく、もっと推敲する、③minimum essentialsを導くまでの過程を丁寧に書く、④題名にある「看護教育のあり方」について総合考察を書かないならば、題名を変更した方がよい、⑤引用文献の記載方法を規定に従って修正するなどの指摘があり、期日までに修正がなされた。

結論として、本論文は、①母乳育児支援に関し看護基礎教育で学ぶべき必要最小限の知識・スキルを明確にしたこと、②教科書分析の枠組作成の新しい手法を開発したこと、③現在出版されている母性看護学教科書の問題を明確にしたこと、④看護学教科書のあり方を提示したことから、保健看護上の意義がある研究であり、研究としても発展性があり、優れた論文といえる。

以上のことから審査委員会は、本論文が博士（看護学）の学位に値すると認めた。